

## <講演抄録>10.唇顎口蓋裂にKartagener症候群を合併した女児の全身麻酔経験(第28回東北大学歯学会講演抄録)(一般演題)

著者	鈴木 広隆, 下田 元, 谷本 愛, 立浪 康晴, 佐藤 実, 猪狩 俊郎, 岩月 尚文
雑誌名	東北大学歯学雑誌
巻	15
号	1
ページ	95-95
発行年	1996-06
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10097/31551">http://hdl.handle.net/10097/31551</a>

### 9. 術後の鎮痛目的に持続硬膜外麻酔を用いた6症例について

藤井道子, 佐藤 実, 猪狩俊郎, 下田 元, 伊藤 泰, 岩月尚文 (歯科麻酔)

今回われわれは, 悪性腫瘍切除時に即時再建を行った6症例に対し, 術後の鎮痛目的に持続硬膜外麻酔を用い良好な結果が得られたので報告した。患者には術後の鎮痛と術中の麻酔管理に硬膜外麻酔を用いることを説明し, 全症例に対して術前日に持続硬膜外カテーテルの挿入を行った。6例中3例は腸骨採取を行った症例で硬膜外カテーテルの挿入は腰部で行い, 他の3例は遊離腹直筋皮弁による即時再建を行った症例で硬膜外カテーテルの挿入は胸部で行い, うち2例は頸部硬膜外カテーテルの挿入も行った。

全症例で術中に硬膜外へ1~1.5% リドカインを注入した。又術後は麻酔薬の持続注入を行った。腰部の2例, 胸部の1例では1% リドカインのみ注入した。他は1% リドカインにブプレノルフィン, プピバカイン, ドロペリドールから数種選択して混合したものを注入し, 途中から1% リドカイン又は0.5% プピバカインの注入を行った。持続注入を行った時間は2日間から6日間であった。

6例中5例においては十分な鎮痛効果が得られた。1例においては鎮痛効果が不十分だったがこれは持続注用量が少なかったためと思われた。

問題点としては創部痛がほとんどないため安静が保ちにくいことがあげられた。

### 10. 唇顎口蓋裂にKartagener症候群を合併した女児の全身麻酔経験

鈴木広隆, 下田 元, 谷本 愛, 立浪康晴, 佐藤 実, 猪狩俊郎, 岩月尚文 (歯科麻酔)

① 唇顎口蓋裂にきわめて稀なKartagener症候群を合併した6歳女児に全身麻酔を行った。

② 手術術式は顎裂部腸骨海綿骨移植術で, 周術期を通じ, 呼吸循環系合併症は特に認められなかった。

③ 気管支拡張症に対し, 周術期を通じ, 慢性気管支炎に起因する気道内分泌物の排出を体位ドレナージなどにより図った。

④ 内臓逆位に対し, モニター類の装着位置を考慮した。

⑤ 鼻炎・副鼻腔炎からの膿性分泌物による気道吸引感染予防のため, 鼻腔内洗浄などにより対処した。

⑥ てんかんに対し, 抗てんかん薬服用を継続し, 瘻

嚢発作の誘因となる麻酔薬の使用を避けた。

以上より, 本症例の全身麻酔管理では症状の緩解とその予防, さらに症状増悪時の万全な対処が不可欠である。

### 11. 中国吉林省北方民族の歯および口腔状態に関する調査研究 (1) 歯科疾患意識調査について

高橋和裕, 駒井伸也, 庄司憲明, 菅原由美子, 丸茂町子, 三條大助 (口腔診断・放射線)

近年, わが国は社会の高度成熟化による食生活や住環境の西欧化に伴って, 体位の向上や疾病構造の変化が顕著となってきている。歯科においても, 口腔衛生の普及により齲蝕は減少しているが, 粘膜疾患や顎関節疾患などが年々増加傾向にある。

一般に, このような疾患の発症には, 個人の体質や生活習慣および口腔内環境などが関与しているといわれているが, その因果関係は明らかでは無い。そこで, これらの要因が現在の日本人の顎口腔領域に及ぼした影響を知る手がかりを得ることを目的として中国北方民族の生活習慣や口腔内環境を調査した。

小麦や粟, 稗などの穀類を主食とし肉類はごく限られた住民について口腔状態に関するアンケート調査を行った結果, ① 齲蝕を自覚している割合は31.3%で歯痛の経験は41.0%にみられたが, 歯科治療の経験は極めて少数であった。② 歯石は成人の殆どに著明にみられたが, 歯の動揺は殆どみられなかった。また, ③ 顎関節の疼痛の経験は4.4%, 雑音の自覚は2.9%, 開口障害は1.5%にみられた。

以上より, 今回の中国吉林省北方民族の調査で現代日本人と生活環境, 特に主食の異なることによる齲蝕, や顎関節症状の相違が明確となった。

### 12. 中国吉林省北方民族の歯および口腔状態に関する調査研究 (2) う蝕および斑状歯について

庄司憲明, 高橋和裕, 駒井伸也, 菅原由美子, 丸茂町子, 三條大助 (口腔診断・放射線)

近年, う蝕は, 減少傾向にあるといわれている。しかし, 一方で, 先進諸国の中で唯一, う蝕の減少のみられない国は日本であるといわれ, その理由の一つとしてフッ素の応用が挙げられ, 先進国ではフッ素の応用によって, う蝕が減少しているのに, 日本ではフッ素の応用が遅れているためにう蝕が減らないとされて